実践報告

スイス・ジュネーブ・日本語補習校での平和教育実践

全　炳徳（長崎大学教職大学院）
中村桂子（長崎大学核兵器廃絶研究センター）
下田杏奈（長崎大学教育学部）

１．はじめに

日本の平和教育の源は 1919 年に結成され 1921 年に改称された日本教職員組合啓明会による国際教育運動からスタートしたと見ている[1)]。時期的に見れば、「永続的な平和」を求めたヴェルサイユ条約から起因し、1920 年 1 月に発足した「国際連盟」と深いかかわりを持つ。中野は「平和教育」を、これらの世界大戦の歴史的教訓から曳き出し、デモクラシーと平和を求める力を育てるもの、と定義する[2)]。更に、宮原は「平和教育」を、「基本的人権尊重の教育」「科学的態度の教育」「共動的活動の教育」の三点を提示し[3)]、これらの態度や能力の育成とむすびあわせて、国際理解の教育が必要であると述べている[4)]。

日本は 1946 年 11 月に平和憲法である「日本国憲法」を公布し、1947 年 3 月に制定した「教育基本法」により、「…世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理念の実現は、基本において教育の力にまつべきものである」と記述している。日本国憲法と教育基本法は、平和的な国家及び社会の形成に貢献することを要求している。その具体的な平和教育の実践は 1950 年から 1951 年頃から始まったと見ている[5)]。

栗原は、広島・長崎の原爆を題材とした「平和教育」の源は、1968 年の長崎証言の会の結成時からであると論ずる[6)]。1967 年 11 月に厚生省から発表した「原爆被爆白書」の「健康、生活両面において一般国民と被爆者との間にはいちじるしい差異は見られない」との意見に対し、翌年に結集した「長崎証言の会」が原爆被爆の証言と継承活動を始めたからである。その後、1969 年 3 月（広島）と 1970 年 5 月（長崎）に「被爆教師の会」が発足し、関連した平和教育活動が活発化する。

長崎大学において、これらの平和教育の理念と継承活動を受け継ぐ大学生を主とする団体として「ナガサキ・ユース代表団」が結成されたのは 2013 年 4 月 4 日のことである[6)]。本実践は、スイスのジュネーブにて行われた核不拡散条約第 2 回準備委員会への参加と合わせて実施した、ナガサキ・ユース代表団としての「平和教育活動」の一部である。

２．実践内容とねらい

2013 年 4 月下旬から 5 月上旬にかけて、ナガサキ・ユース代表団のメンバーとして、スイスのジュネーブに派遣され、平和教育活動を実践したのは第三著者の

下田である。著者等は平和教育のための事前準備をし、スイス現地で核不拡散条約や世界の核の現状に関する知識理解を深めるとともに、核廃絶に向けての活動をする中、スイスのジュネーブにて平和教育活動として教育実践を行った。

今回の平和教育の実践は、ジュネーブ日本語補習校の小学部にて実施され、長崎原爆を題材とする平和授業の形式で行われた。これまで、第三著者は平和教育を受けたという実感がなく、大学に入るまでの唯一、原爆関連の平和学習をしたのは小学 6 年生の修学旅行時に訪れた、広島原爆資料館の見学だけであった。その時の印象として強く残っているのは、ケロイドの写真や被爆直後の人々を表した蝋人形などである。これらの経験からは、「平和教育＝戦争」の恐ろしさを知るものという認識があり、大学生になるまで、平和学習に対して強い拒絶感・拒否感を抱いていた。

上述した第三著者の経験からも明らかなように、平和教育の批判的考察の１つに「原爆・空襲・疎開体験の聞き取りなどの多彩な実践の蓄積が狭義の平和教育として現場に定着してきたが、これらの平和教育は明らかに一面的であり、世界平和を自分達の手でつくり出すという気構えに欠けていた」という指摘がある。今回、実践の対象となる児童は、第三著者以上に平和教育に対する、いわば耐性・免疫というものがない。したがって、長崎の平和教育を長年受けてきた児童と比較すると、同じ事実を同じ方法で伝えても受ける刺激の強さが大きすぎるのではないか、という懸念があった。

そこで本実践では、表現の仕方に創意工夫を凝らし、日本語補習校の児童にも「戦争の恐ろしさを感じることにとどまらず、未来への平和の意志をもつ」ことへと繋げることができるように配慮を行った。更に、これまでの日本の平和教育の一面性を問い直し、子ども達に世界平和を自らの手でつくり出すという姿勢を育むことをねらいとして定めた。

３．実践した指導案

○対象児童：ジュネーヴ日本語補習校の 5,6 年生を対象（17 名）

○児童観：ほとんどが国連職員等の子息であり、普段は現地の全日校に通い、週一日補習校に通っている。全日校での使用言語はフランス語 60%以上、約 40%を英語が占めるため、日本語の語彙力や日本の戦争被害や核問題についての知識はほぼ家庭または補習校のみで得るものとなる。

○授業の視点：戦後 68 年が経過し、さらに海外に住む児童にとっては、平和について考える機会はほとんどなく核兵器の問題は抽象的な問題として捉えられる傾向がある。そこで、今回は実際の被害状況の写真や被ばく者の体験談を題材とした紙芝居、さらに「ジュネーブ日本語補習学校現地に原子爆弾が投下された」ことを仮定したＩＣＴ教材を作成し、核兵器の問題を個人的な問題として捉えるように配慮した。また、授業の流れに沿い、「過去→現在→未来」の時間軸に従って学習を進めていくことで、児童一人一人の考えや感じたことを

尊重し、各々が平和な未来への思いを強めていくこと等を授業の視点と定めた。

○目標：長崎の原爆による被害を知ることを通して、核兵器の恐ろしさや悲惨さを理解することによって、人の痛みの分かる豊かな心を培い、二度と核兵器による悲しい過去を繰り返してはならない、という強い意志とこれからの希望ある未来の形成者としての意識をもって平和への思いを深めることを授業の目標とした。

○実践授業案：

時間	生徒の活動	教師の活動	学習材
10 分	1. 第一活動 ・ハートの台紙に「私の大切なもの」を書く	1. 第一活動 ・ハート型の台紙を配る ・書くものについての説明 ・書き終わったら、回収 留意点 ・指示をするときは「大切なもの」ではなく、「好きな食べ物」「好きな場所」「好きな人」など抽象的なものからより体的な表現に児童が考えやすいように例を示しながら説明をする	・ﾊｰﾄﾞ型の台紙 ・ペン ・Power point①
10 分	2. 長崎の原爆（過去）の被害状況について理解を深める	2. 長崎の原爆の被害について理解を深める ・現在の長崎の街の様子について紹介する ・長崎の有名な食べ物や建物などを紹介し、最後に長崎について知っていることを児童に問いかけをし、その際に「原子爆弾投下」についての事実は児童の発言から出させるようにする	・Powerpoint② ＜写真１＞ ○観光地 ○町並み ○食べ物
	○写真から当時の被害状況について知る	○写真から当時の被害状況について知る	・Powerpoint③ ＜写真 2＞ ○原爆投下直後のキノコ雲の様子

		＜留意点＞ ・児童に刺激が強くなりすぎることがないように、写真では建物や風景に焦点を絞り、当時の被害状況や原子爆弾の脅威を理解することができるようにする	・Powerpoint④ ＜写真 3＞ ○ google earth 使用作成画像 ○原爆投下前と後の古写真 ・浦上天主堂 ・山王神社 ・城山国民学校 ・大学病院
10 分	○紙芝居　朗読	○紙芝居　朗読 ＜留意点＞ ・当時被害を受けたのは建物だけでなく、多くの人々が被害を受け苦しんでいた事実に焦点を当てる。また、原爆の被害は身体的な被害だけでなく、差別や偏見といったその後も続く精神的な苦しみの部分も非常に大きかったということにも気づくようにする	・紙芝居 ・紙芝居 「わたしたちの被爆体験」
10 分	3. 現在の自分たちに置き換えて、核兵器の脅威について考える ○長崎の被害状況と比較しながら、ジュネーブに原爆が落ちたことを仮定して予想される被害を想像する ・ジュネーブ市内、首都ベルン（直線距離約 130 キロ）、隣接国であるフランスのパリ（約 400 キロ）からの上空 9000 メートル高のキノコ雲の様子から、大きさを実感する	3. 現在の自分たちに置き換えて、核兵器の脅威について考える ※＜留意点＞ 長崎の爆心地が山に囲まれた地理的な条件から、被害が抑えられたこと、現在の技術の進歩により、現在の核兵器の威力はより強力なものになっていることを指摘する	・Powerpoint⑤ ・google earth 使用作成スライド（3D 再現キノコ雲を地図上に置いたもの）

５分 最後	4. まとめ ○核兵器の問題は「過去の問題」ではなく、「現在の私たちの問題」であることを実感する ・現在の長崎市の平和活動の取り組みを紹介し、過去から明るい未来へとつなげようとする平和へのイメージを膨らませる	４．　まとめ ○「わたしたちの大切なもの」提示、贈呈 ・児童が授業の始めにそれぞれ書いたハートの台紙を一つにまとめ、提示する ・「核兵器一つで自分たちの身の回りの大切なものが一瞬にして失われてしまう」とい考え方を共有する ○折鶴贈呈	・Powerpoint⑥ ＜写真＞ ・平和式典 ・平和集会 ・千羽鶴 ・「わたしたちの大切なもの」として一枚の布にまとめたもの

４．アンケート調査結果

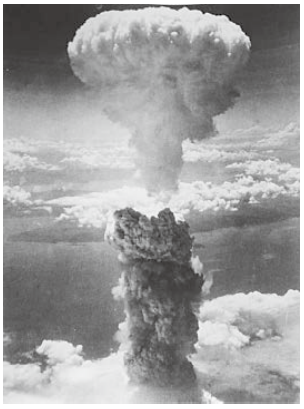
本実践後、本授業を受けた児童を対象にアンケート調査を実施した。アンケート調査結果から以下のような結果が得られた。結果について、大別して「効果的な視覚教材」及び「効果的な授業内容」の２点について述べる。

4.1　効果的な視覚教材について

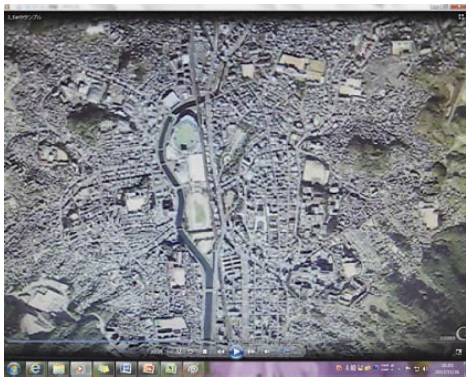
本実践で提示した視覚教材は以下の５点であり、それぞれの内容を簡単にまとめると、次のように二つの項目に大別することができる。

表１　効果的な視覚教材の提示例

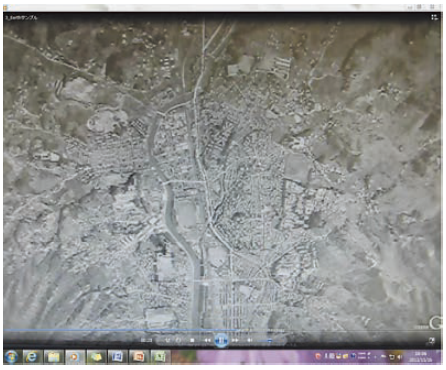
写真資料 -------- 実際の長崎原爆の状況がうかがえる写真	資料１：原爆投下直後のキノコ雲の様子 （図１を(a)を参照）
	資料２：被爆前後の長崎の全景を比較した動画と写真 （図１を(b)(c)(d)を参照）
	資料３：建物の被爆前後の様子を比較した写真 （浦上天主堂、山王神社等） （図１を(e)(f)を参照）
ＩＣＴ教材 ------- 想像力を働かせることができる、パソコン上に実現した3Dの模擬画像資料	資料４：Google Earth によって作成した補習校に原爆が落ちたことを仮定したときの画像 （図１を(g)を参照）
	資料５：Google Earth によって作成し、ジュネーブを爆心地として仮定し、キノコ雲の規模を提示した画像（図１を(h)を参照）



(a) キノコ雲



(b)長崎原爆前後の動画



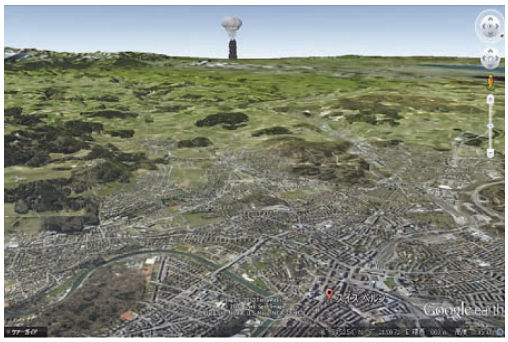
(c) 長崎原爆前

(d)長崎原爆後

(e)浦上天主堂

(f)山王神社

(g)ジュネーブの補習校上のキノコ雲



(h)ｼﾞｭﾈｰﾌﾞのｷﾉｺ雲をパリー見る

図１　提示した視覚教材の事例

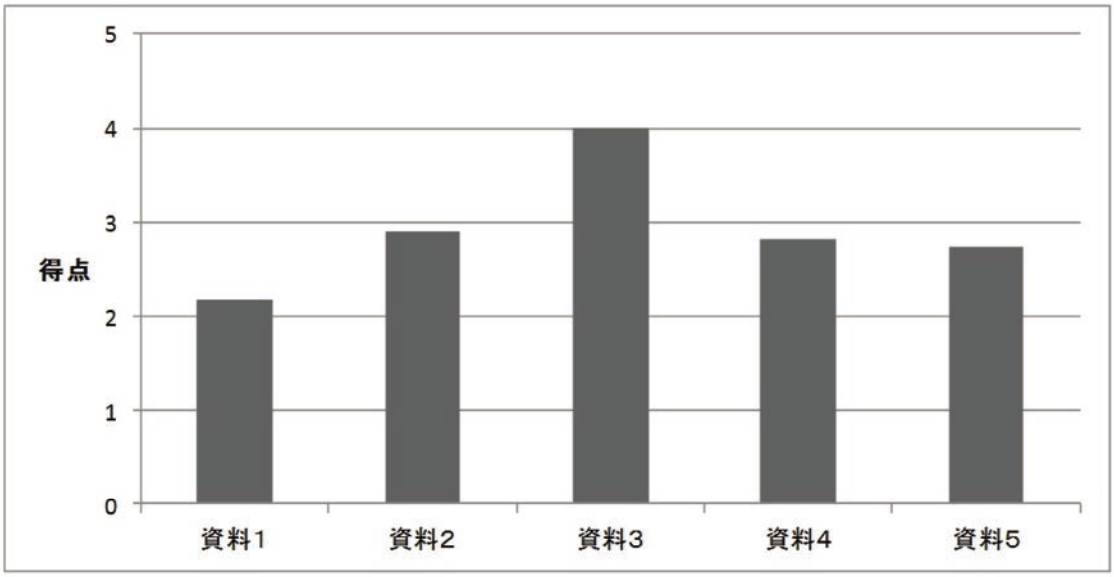


図２　５点満点の評価から得た得点状況

予想段階においては、長崎は対象の児童にとって親しみのないはるか遠くの地であるため、長崎原爆に関する実感を伴った学びが難しいのではないかと感じていた。そのため、児童の長崎原爆に対する想像の補助になるようにＩＣＴ教材を活用した学習が効果的であると考えていた。しかし、結果より、ＩＣＴ教材を用いて児童の身近な生活環境を題材として原爆被害を想像することよりも、長崎原爆の被害状況を示した実際の写真など「本物」を提示することの有効性が明らかになった。

得点の一番低い点数となったのは「キノコ雲」の写真であった。身近な平和教育を受けた人々かしてみれば「キノコ雲」は原爆を象徴する、平和を求める人々のある意味シンボルのような存在である。しかし、海外の子どもたちのように「キノコ雲」の存在を初めて目にする人々からしてみれば、「キノコ雲」はただの雲の一種類にすぎない。原爆についての爆発の様子を表す独特な「キノコ雲」の様子は「キノコ雲」の背景や歴史的な意味の詳細を聞かない限り、ただの独特な形をした雲の写真にすぎないと判断される。

同じ写真であっても、原爆が落とされた長崎の写真は得点が高かった。長崎からはるか遠いジュネーブで生活をする児童であるからこそ、被爆地としての長崎の光景がより新鮮に刺激的に映ったのかもしれない。この結果より、長崎や広島の被爆都市で平和教育に親しんできた児童より、その他の地域で暮らす、長崎や広島で行われている平和教育を受けた経験のない児童に対しては、長崎や広島の「本物の写真」の提示が有効であることが分る。

４．１　授業内容について

表２　本実践での主な授業活動

教師の活動	過去	長崎の被爆	活動１：被爆関連の紙芝居の読み聞かせ
			活動２：被爆前後の写真によって長崎の原爆被害の様子を知る
	現在		活動３：現在の長崎の平和継承活動を知る
	未来	児童の生活環境に置き換えて身近なものとしての理解を深める	活動４：ジュネーブに原爆が投下されたことを仮定した 3D 画像によって、原爆被害について想像を深める
児童の活動			活動５：「自分にとって大切なもの」を画用紙に書き、一枚の紙に貼り「私達にとっての大切なもの」として『核兵器は大切なものを破壊するもの』という考えを共有する。
		未来に向け	活動６：平和の願いを込めた折り鶴づくり

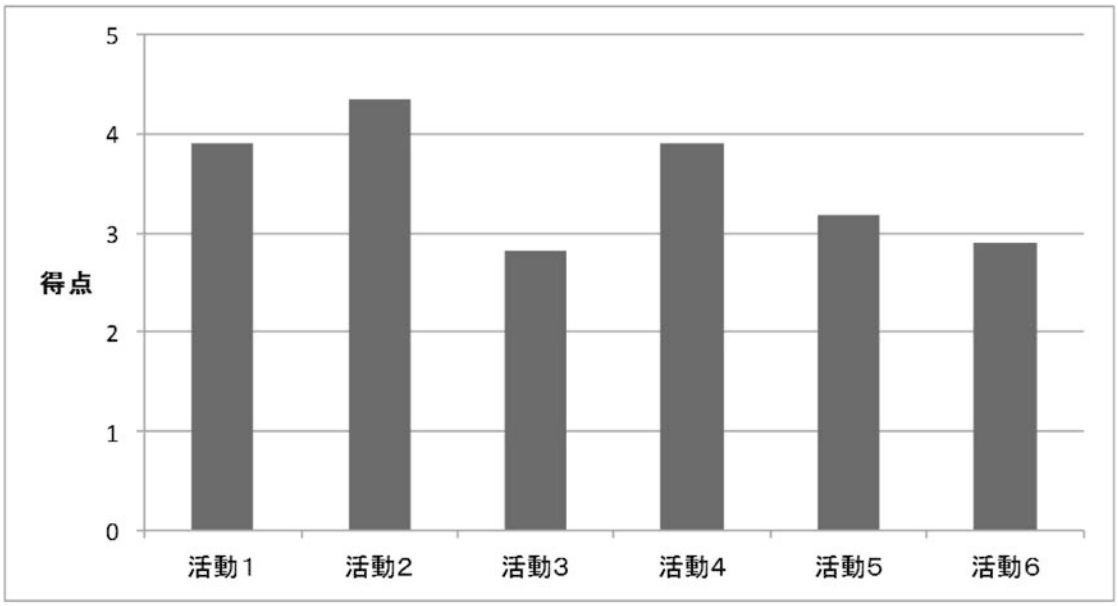


図３　５点満点の評価から得た得点状況

本授業は大別して、表２に示されているように６つの活動で構成されている。詳細は「紙芝居」、「写真」の提示、原爆継承活動の「座学」などが教師の活動である。これに対して児童の活動は「3D 画像」による想像活動、「大切なもの」の討論活動、「折り鶴作り」等であった。授業の最後に、受けた授業の五段階評価をしてもらった。

図３からも明らかなように、授業活動の中で最も効果的であると考えられるのが、「活動２：被爆前後の写真によって長崎の原爆被害の様子を知る」である。こ

の結果からも、長崎原爆の被害の様子を示した写真の提示、つまり長崎原爆の被害をより『本物』に近い状態で見て感じることができる「写真」が最も効果的であるということが分かる。

次に効果的であると考えられるのは同じ値を示す、「活動１：被爆体験を題材とする紙芝居の読み聞かせ」と「活動４：ジュネーブに原爆が投下されたことを仮定した画像によって、原爆被害について想像を深める」である。この結果から、長崎の原爆被害をより「本物」に近い状態で知り、それを自分の想像力によって学びを深めることがジュネーブ日本語補習校の児童においては最も効果的な授業方法であることが分かる。

得点の一番低い点数を得たのは「活動３：現在の長崎の平和継承活動を知る」であった。座学の難しさを思い知らされる結果である。子どもたちからしてみれば平和活動内容の知識より、写真や映像などがインパクト強かったようである。

以上の結果から、教材としても内容としても ICT は「補助的に」用いるのであり、主として用いるのはこれまでの平和教育同様に、写真や口頭など古典的な方法であり、「本物」をより「本物に近い状態」のまま、ありのまま伝えることに重きを置くべきであるということが分かる。

５．まとめ

本実践から、現在の情報基盤社会を生きる子ども達においてもＩＣＴを用いた架空、あるいは仮想のものより、実際の「本物」に近いも「写真」の有効性が明らかになった。さらにこれからの平和教育においても新しいものを追い求めるだけでなく、戦後 68 年経っても「長崎の本物の被爆経験」は貴重な平和教育の題材であることを注目すべきである。

今回、海外の平和教育の反省点としては、単発の授業であるがゆえ、教師側の思い溢れ内容が多様になってしまい、一貫性の感じられないものとなった部分である。事前に内容をよく選別し、一貫性のあるテーマを通した授業実践が必要であることを痛感した。さらに、ジュネーブ日本語補習校の児童という特異な児童観をうまくとらえられていなかったように感じた。日本語の語彙力や歴史についての知識等も事前準備として注意を払うべきだった。「原爆投下」「被爆地」など、なじみのない言葉が児童にとって「ゲンバクトウカ」「ヒバクチ」などの、意味理解を伴わず音としてのみ伝わってしまったところもあったかもしれない。

海外で暮らす日本の子供たちに「平和教育」をする場合、より分かりやすい補助的な説明を加え、また「爆心地」を「原子爆弾が落とされた地点」など分かりやすい言葉で言い換えて説明するなどの工夫や配慮をして授業をすすめていく必要性を実感した、貴重な経験となった。

最後に、本実践ができるようにご配慮下さったスイス・ジュネーブ日本語補習校の皆様、子どもたちにには大変お世話になった。ここに記し、感謝の意を表す次第である。

参考文献

1. 村上登司文：戦後平和教育論の展開―社会学的考察―、広島平和科学 22、pp. 179-200, 2000.
2. 中野光:両大戦時期における日本の平和教育、教育学研究、Vol 58, No.1, p.173, 1991.
3. 宮原誠一：平和のための教育、女性線、Vol. 5, No.1, pp.34-39, 1950.
4. 宮原誠一：父母と教師の協力―平和と独立のための教育の歩み―、世界 、pp.179-186, 1955.
5. 宮原誠一：平和教育の動向、日本資本主義講座、Vol. 9, p.433, 1954.
6. 栗原貞子：核時代に生きる―ヒロシマ・死の中の生―、三一書房、pp. 170-174, 1982.
7. http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/